

博士論文 概要書

題 目

18 世紀イギリス経済思想の展開における消費者概念の形成
ロックからスミスまで

The Conceptual Rise of the Consumer in Economic Thought of Eighteenth-Century England
From Locke to Smith

氏 名 鈴木 康治

本研究の論文タイトルは、「18世紀イギリス経済思想の展開における消費者概念の形成 ロックからスミスまで」である。本研究の主題は、18世紀イギリス経済思想という言説的枠組みにおいて、消費者概念の形成をイギリス消費論の系譜づけを行なう作業を通じて論証することである。消費論としての系譜づけを行なうために本研究が考察対象とする論者は、次の8人である。すなわち、ジョン・ロック(1632-1704)、ニコラス・バーボン(1640-1698)、バーナード・マンデヴィル(1670-1733)、ダニエル・デフォー(1660?-1731)、ジョージ・バークリ(1685-1753)、デヴィッド・ヒューム(1711-1776)、ジェームズ・ステュアート(1713-1780)、アダム・スミス(1723-1790)。

第1章「序論 18世紀イギリス経済思想と消費論」では、18世紀イギリス経済思想における消費論に関する背景的言説を概観する。本研究の問題設定について、その経済思想史研究上の妥当性を明示するためである。それはまた、本論の内容理解を助けるための概論としての意味をもつ。

本研究の考察範囲はロックからスミスまでのイギリス経済思想である。ロックからスミスまでという経済思想の展開を端的に特徴づける言葉を探すとすれば、それは「統治論から経済論(ポリティカル・エコノミー)へ」として表わせる。ポリティカル・エコノミーとしての経済学は、まさにこうした思想的変容の中から新たな体系的言説として生成されていくこととなる。

統治論から経済論へというこの18世紀イギリスにおける社会思想史上の力点の移行は、それを自由論との関係で見ると、消費者概念というものが経済学体系の成立と軌を一にして練成されてくることとなる理由を示唆するものである。自由な行為主体としての諸個人というものが文化的な諸制度の相互作用の運行を通じて継続的に保障される社会、その社会においては秩序の安定と経済的な富裕とが同時に実現されることとなる。ロックは統治の原理として自由を擁護する。スミスの議論はこのロックの統治論に社会の富裕化という経済論を接合するものである。そうした思想的展開の帰結として、自由という社会的価値には、安定的秩序のための統治、および経済的福祉のための富裕という2つの公益性の原理としての意義づけが付与されることとなった。

消費者という概念は、諸個人の一定の行為類型を表わす語である。いわば消費という経

済行為に関わる当該個人の諸要素を集約して記号化したものである。その意味で、消費者概念とは、諸個人の社会的役割を指す語であるといえる。この社会的役割としての消費者の行為というものは、それを遂行する諸個人の行為の自由が保障されて、はじめて実践可能となるものである。別言すれば、消費者役割とは、行為の自由を支える文化的な諸制度による仕組みが構成されているという社会的条件の下でのみ、その正規の役割が行為可能となるということである。消費者役割を可能とする制度的な仕組みは、その確立のための基礎を統治原理であり富裕原理でもある自由という社会的価値の実現ということに置いている。そのひとつは、ロックのいう社会契約としての所有の保障という私有財産権を支える制度に関わるものである。この制度の確立により、諸個人は諸財そして何よりも貨幣を所有することの自由を有することとなり、同時に、その所有する貨幣を使用して、購買というかたちで自己の欲望を満たすための諸財を消費する自由も保障されることとなる。加えて、この自由は、富の蓄積を可能にすることで、富裕を追求する自由（機会）をすべての社会成員に付与するものである。こうした所有の安全を基礎とするロック的な意味での行為の自由の確立は、スミスのいう富裕が生み出す秩序原理を機能させる制度的条件を用意する。諸個人が富裕を目指して勤労するという社会の枠組みが整えられると、そこには徐々に、富の多寡を基準とする社会的階序が構成されてくるようになる。富裕という属性をめぐる経済的競争が、諸個人の社会的階序における位置づけを定めるものとして行為動機の中で重要さの比重を増していくのである。富裕を追求する諸個人の行為の自由は、その帰結として、富を基準とする一定の安定性をもった社会的秩序をもたらす。これが、スミスの体系においては、富裕原理としての自由が統治の原理でもあることの論理である。そして、このスミスの体系においても消費行為が富の階序を支える主要な機能を担うこととなる。後にT.ヴェブレンが、『有閑階級の理論』の中で、顕示的消費という語において一般化することとなる、消費の顕示性ということである。富を所有する諸個人はそれを社会的に顕示して、はじめて富裕であるとの属性を獲得する。この富裕という記号性を顕示する有効な手段が消費である。諸個人はその消費様式においてその富裕を顕示し、富の階序に占める地位を自他共に許すものとするのである。したがって、この点からすれば、消費者概念とは行為の自由を象徴する記号であるといえる。さらにはまた、それは、行為の自由を媒介とする統治および富裕という2つの公益性を象徴する換喩表現であるともいい得る。もしそうであるとするならば、消費者概念が経済学体系の成立と共に形成されてくる理由は明らかである。すなわち、経済学体系という学知にとって、消費者概念とは、その体系性の論理を支えるための不可欠な要素であり、かつはまたその学問としての目的性そのものを象徴する記号でもあるということである。ステュアートにしろスミスにしろ、その2つの経済学体系にあって、消費者概念はその体系性の中でその論理環を支える重要な位置づけを担っている。消費者概念が経済学体系の成立と連動して形成される理由はこの点にある。

次に、18世紀イギリスの言説空間における、消費そのものにまつわる論点について概観する。18世紀イギリスの言説空間では、奢侈論争の再燃があった。18世紀の奢侈論争では、奢侈の是認論に対する支持が着実な広がりを見せたということが特筆に値する事実である。18世紀のイギリス社会とは奢侈的な社会であるが、にもかかわらず、その社会は同時に富裕かつ強大でもある。奢侈批判の言説はこの事実を説明する論理をもたなかった。奢侈批判の言説が社会的現実を説明する説得力をもち得ない状況にあって、奢侈の遍在という現実を前提として組み込んだ新たな社会理論の構築が要請された。奢侈是認論の系譜とは、この問題への解答という側面があった。消費者概念とは、こうした社会理論に関わる問題への取り組みの中から、その知的な成果のひとつとして生成されたともいえる。

18世紀イギリスの消費論にはその議論的特徴を異にする2つの系論が見出せる。本研究では、それらの議論的特徴に鑑みて、その2つの系論を「欲望的消費論」および「貨幣的消費論」と呼ぶこととする。欲望的消費論の諸特徴は次のような点である。

- 1．諸個人の消費行為の動機として、理性に対する欲望や情念の優位を想定する
- 2．奢侈（濫費・闊達など）の社会的有用性など、支出としての消費の側面に注目する
- 3．支出（貨幣使用）の裏面として、貨幣稼得のための勤労を重視する
- 4．注目する消費の社会的機能　消費主導型の経済発展力が主導する欲望や文化の洗練化

一方、貨幣的消費論の特徴とは以下のような諸点である。

- 1．諸個人の消費行為に合理性の優位を認める
- 2．購買力という経済的な力能をもつ貨幣保有者として消費者を捉える
- 3．購買力が他者の行為を支配可能にする点に消費における行為の自由を確認する
- 4．注目する消費の社会的機能　市場経済を中心とする市民社会の秩序形成・維持

18世紀におけるイギリス消費論の流れは、その背景において消費に関するこのように特徴の異なる2つの系論が混合する中から生み出されてくる。欲望的消費論と貨幣的消費論との相互作用は、その結果として、18世紀イギリスの消費論の展開において2つの大きな傾向性をもたらすこととなった。その2つとは、消費論における脱道徳化の傾向、および脱社会階層化の傾向ということである。

消費論の脱道徳化という傾向は、奢侈論争の中から生み出されてくる。というよりは、奢侈論争とは、そもそも奢侈是認の立場から従来の奢侈（消費）規制の議論を論駁する目的で争われたものであり、そこには議論の性質上、旧来の道徳性に対する非難というかたちでの消費の自由という脱道徳化の主張が最初から含まれていたともいえる。この脱道徳化の流れは、その後、表面的にはマンデヴィル批判というかたちで、パークリやF.ハチソン、さら

には、ヒューム、スミスなど、とりわけスコットランド系の道徳哲学者からの道徳論的な揺り戻しを受けることとなる。しかしながら、奢侈概念に関する精緻化が却ってそうした道徳論的な揺り戻しの過程において進行することとなる。その結果、それは消費論の脱道徳化の傾向を一段と押し進めていく新たな論理の展開を用意するものとなっていく。

消費論の脱社会階層化というもうひとつの傾向性は、この脱道徳化の流れにおいて派生したものである。消費論における脱社会階層化の議論とは、バーボンやマンヴィルなどの奢侈是認論に対する道徳論的な揺り戻しの過程にあって生成されてくるものである。17世紀末から18世紀初頭にかけて論を展開したバーボンやマンデヴィルの消費論では、一定の経済的機能を担う主体が社会階層別に固定されていた。その議論前提として、社会における消費者役割を担う階層としては、上流の富裕層が想定され、一方で、下流の貧困層には、もっぱら生産に従事する生産者（勤労）者としての位置づけが与えられている。この議論前提に立脚してマンデヴィルらは「富裕層の奢侈と貧困層の勤労」という経済構造に関する図式を提示する。マンデヴィルらの議論では、社会階層別にその経済的な機能が截然と区分されたこのような議論図式が前提されているのである。この図式においては、実質的な消費の自由とは、富裕な上流層にのみ限定的に享受されるものとなっている。その意味でこの図式とは、マンデヴィルらの議論には、消費に関する富裕層の経済的な特権を依然として容認する一面があることを示すものである。

この「富裕層の奢侈と貧困層の勤労」という消費論にまつわる議論図式は、18世紀の中頃から次第にその理論としての説明力を低下させていく。その歴史的背景には中流層の台頭という現実の変化があった。中流層が経済的にも政治的にもその影響力を増大させていくにつれて、従来の経済的役割に関する社会構造はその変革を余儀なくされることとなった。また、下流層労働者の経済的役割についても、経済論の観点からの見直しが進められていく。そうした中で、従来はもっぱら勤労要員としての位置づけしか与えられてこなかった下流の労働者に、国内の消費需要を拡大するための消費者としての役割が与えられていくようになる。

奢侈をめぐる中流層論および下流層論としての展開は、消費者役割の担い手を上流層に限定的なものから、より一般的なものへと拡大するものである。その過程において生じた消費論における脱社会階層化の流れは、ステュアートおよびスミスの経済学体系の中に接合され、ついには、勤労や節儉という中・下流層由来の道徳性を併合させた新しい行為類型としての消費者像をそこに結像させることにつながっていく。経済学体系における学知としての消費者概念の形成である。

第2章「18世紀消費論の源流と消費者役割の未分的把握」では、18世紀消費論の先駆的な代表者としてロックとバーボンの経済思想を検討する。両者の思想は、それぞれの特徴において、後の18世紀消費論における2つの系論、すなわち欲望的消費論と貨幣的消費論とを先取している。ロックの議論はとりわけその貨幣論とのつながりにおいて、貨幣的消費論の嚆矢となるものである。他方、バーボンの思想は、その欲望論からの消費論的含意において、後の欲望的消費論の系譜を先導するものとなっている。

第2章第1節「消費者と貨幣保有 J.ロック」では、ロックの経済思想の貨幣論を中心に

取り上げる。ロックは、その主要な諸著作を通して、つねに貨幣の保有および使用について言及している。ロックにとって、貨幣とは、社会分析のためのひとつの鍵概念であった。本節としての直接的な主題は、ロックの思想体系のうちに消費論としての含意を見出すことである。ロックによる貨幣保有に関する行論の中から、社会理論としての消費論的含意を析出することがその目的である。貨幣の社会的機能の重要性を認めるロックの思想は、消費論の観点からの重要な含意をもっている。ロックは、はからずもその貨幣論的な社会分析により、貨幣保有者としての消費者の側面をも明確に描き出していたともいえる。消費と貨幣との関係性についての問題は、18世紀に入ってから、例えば、デフォーやバークリ、J.ヴァンダーリント、ステュアートなどの注目するところとなり、その中から、より精緻な議論が展開されていく。こうした諸学説を貨幣的消費論の系譜と呼ぶとすれば、消費と貨幣とを結びつけて議論するロックの消費論を、この貨幣的消費論の展開への道筋を示す先駆的な学説として捉え直すことも可能となる。ロックの貨幣論は、貨幣保有という行為類型にまつわる諸個人の消費行為の諸側面、さらにはその社会構成上の作用に至るまで、消費と貨幣との関係についての諸点を考える上で、きわめて独自のかつ示唆的な消費者像を提供する、ひとつの消費論としての再読が可能である。

第2章第2節「消費者と精神的欲望 N.バーボン」は、バーボンの思想の検討である。検討の中心となるのはその欲望論である。バーボンは、マンデヴィルと同様、消費論から道徳論的色彩を払拭することで、消費の社会理論をいち早く展開し得た論者のひとりである。しかも、その議論は、学説史上にあっては、マンデヴィルのものに先駆けている。バーボンの消費論は、特徴ある欲望論を基礎に構成され、その中で、人間の欲望は身体的欲望と精神的欲望とに大別される。精神的欲望の源泉は人間の想像性であり、無限に拡大する可能性をもつ。近代市民社会では、消費者としての諸個人が、その欲望を自由に開花させることができ、はじめて社会は富裕となるとバーボンはいう。そのためには、精神的欲望の拡大がとくに重要であるとバーボンは考える。本節での主題は、欲望論を基礎とするこのバーボンの経済思想について、それを消費論という視点から再読することを通して、その消費学説としての貢献を明確にすることである。バーボンは独自の欲望論を人間行為の論理的基礎として、そこから消費の社会理論を展開している。その消費論は、欲望的消費論としての先見性が指摘できるものである。その先見性の中心とは、その理論が、消費行為の動機的社会性というものを論理の基軸に据えている点に見出される。そこには、消費の対人効果という顕示的消費論としての重要な論点の指摘が含まれているからである。バーボンの議論は、この消費の対人効果という論点を、精神的欲望の無限性および社会性という諸個人の行為動機的前提との関連において捉えることで、ひとつの消費の社会理論を構築するものであったといえる。

第3章「奢侈是認論と消費者概念の脱道徳化」では、消費論の脱道徳化の傾向を決定づけた議論の典型例として、マンデヴィルとデフォーの経済思想を検討する。『蜂の寓話』における奢侈是認論は、18世紀イギリスの言説空間において奢侈論争を再燃させることとなった。その中でマンデヴィルは、生存と直接的に関わる消費以外はすべて奢侈であるとして、事実上、奢侈を道徳論の対象から除外している。それは経済論としての消費の議論枠組みを確立させるものであった。一方、デフォーは、このマンデヴィルの奢侈是認論を経済論として評価しつつも、道徳論としては悪徳としての奢侈を社会秩序の紊乱として非難するものである。この奢侈をめぐる経済論と道徳論との相反をデフォーはジェントルマン論として統合し、奢侈の悪徳性を消費としての有徳性へと読み替えていく。このデフォーの議論は、消費論の脱社会階層化を促進する中流層論としての側面も有しつつ、それ以上に脱道徳化の傾向を助長するものとなっている。

第3章第1節「富裕層の奢侈的消費と貧困層の勤労 B.マンデヴィル」では、マンデヴィルの『蜂の寓話』を中心に検討を加える。マンデヴィルの『蜂の寓話』には、「私悪は公益」という副題がある。この悪名高き言葉は、のちにF.A.ハイエクが自生的秩序として表現した社会メカニズムを表現したものである。マンデヴィルはこの自生的秩序観に基づき、社会的機能に焦点を当てた消費の社会理論を展開する。また、近代市民社会では諸個人がみな消費者という社会的役割を担う存在であることを示すことで、従来の道徳論的色彩を消費論から払拭することに貢献することとなった。本節としての主題は、こうしたマンデヴィルの社会思想を消費論という視点から捉え返すことである。とくに、主著である『蜂の寓話』の再検討を通じて、マンデヴィル思想のもつ消費に関する諸論点を析出・再構成することで、マンデヴィルの消費論とは重商主義期のたんなる奢侈是認論であるとの従来の見解を見直すための手掛りを提供することである。そこからは、マンデヴィルの消費論の要諦が、一方では、消費者としての諸個人の行為動機を情念や欲望から説明し、他方では、消費者としての役割を担わなければならなくなった社会状況との関連から消費行為を見ていくことで、消費者としての役割主体が市民社会という制度体との相互作用において、種々の社会的機能を果たしているというひとつの認識図式を提供するものであったことが理解される。マンデヴィルは、『蜂の寓話』において、消費行為を中心とする富裕な近代市民社会の諸相とその論理とを論じるものであった。

第3章第2節「上流層の奢侈的消費と消費による社会的階序形成 D.デフォー」では、デフォーのジェントルマン論を手掛かりにその奢侈論について論じる。デフォーは、マンデヴィルの『蜂の寓話』における奢侈是認論がもつ経済論としての正当性を理解していた。デフォーの経済論の基本的主張はマンデヴィルによる奢侈是認論の方向性を共有するものである。本節での主題は、デフォーの奢侈論の検討を通じて、デフォー思想の中に消費論としての含意を見出すことである。とくに、デフォーのジェントルマン論の検討から、ジェントル

マン論と奢侈論との関連性、およびそれらの消費論的な接合可能性を論証することで、デフォー消費論としての論理を析出することを企図する。デフォーはその奢侈論において、経済論の中に道德論を包摂する。そのことにより、デフォーは奢侈の問題を消費論として論じることを可能にしたといえる。ただし、それは経済論から道德論を完全に放棄するというのではなく、社会構造の変化が要請する新たな社会秩序の構築を模索する中で、経済論と道德論との整合的な接合を可能とする議論である。デフォーは、貨幣経済における諸個人の経済的影響力に基づく階層的秩序の再編過程という新たな社会秩序の出現を的確に把握していたといえる。経済力に裏打ちされた有能かつ有徳な諸個人による支配というものに、デフォーは富や消費様式を規準とする新しい社会秩序の可能性を見ていた。デフォーの消費論は、消費における富の顕示性ということのうちに、社会秩序の安定化に寄与する道德的な規制力が作用する可能性を見出すものである。

第4章「奢侈概念の変容と消費者概念の脱社会階層化」では、消費論の脱社会階層化の傾向を押し進めることとなった議論の代表例としてバークリとヒュームの経済思想を検討する。バークリはアイルランドの貧困問題という現実と直面する中で、その経済論を構築している。バークリの目にはアイルランドの貧困問題の構図とは、まさに「富裕層の奢侈と貧困層の勤労」という消費論の議論図式そのものとして映じていたといえる。その中で、バークリは貧困層の勤労意欲と消費の拡大こそが社会の富裕化のための方策であると主張していく。他方、ヒュームの見た現実とは、中流層が台頭するイングランド（およびスコットランド）社会であった。ヒュームにしてみれば、消費者役割とは社会階層的な区分をまったく必要としないものである。むしろ消費とは、購買力をもつ諸個人がその品格や趣味の洗練さを欲望の開花として顕示させる機会のことであり、それはまた、新たな文明社会としての社会階層の構成をもたらす統治原理としての自由を発現するものである。

第4章第1節「富裕層の愚行的消費と消費者としての貧困層 G.バークリ」では、バークリの『問いただす人』の中に含まれるバークリの貨幣論を中心に検討を加える。バークリは、マンデヴィルの奢侈論が脱道德論的な性格をもつものであることを批判して、消費論の道德論的な揺り戻しをいち早く図ったひとりである。本節の主題は、バークリの社会や経済に関する所論の検討を通じて、消費論としてのバークリ思想の貢献を明確にすることである。諸個人の人間性に潜む種々の愚かさの芽を摘みとり、諸個人を公益の増進へと寄与させていくための政策的道筋を提示するということが、それがバークリ思想の根幹にある問題設定である。バークリにとって、奢侈の問題、とりわけ貧困国（アイルランド）における奢侈的消費とはまさしくひとつの愚行の表れであった。バークリ思想の中には、奢侈や流行についての議論があり、さらには独自の貨幣論も含まれている。バークリ消費論の輪郭は、これらの諸点を検討することで析出が可能である。富裕化のためには、勤労の成果は下流層をも含

めた社会の全成員に享受される必要があるとするバークリの主張は、従来の消費論の「富裕層の奢侈と貧困層の勤労」という議論図式の論拠に疑問を投げかけるものである。また、貨幣とは力能を表象する切符と考えるバークリの貨幣論は、貨幣使用者としての消費者が、その経済行為において支配 被支配の関係に置かれることとなる論理性を指摘するものとなっている。バークリ思想の消費論としての含意はここに見出せる。すなわち、消費行為に付帯する社会階層的役割の払拭、および貨幣的消費にまつわる支配 被支配関係の把握という諸論点である。

第4章第2節「中流層の中流的消費と文明社会の消費文化 D.ヒューム」では、ヒュームの経済思想をその中流層論との関係において検討する。ヒュームが当時の繁栄するイギリス社会の分析を通して見出したもの、それは中流層文化としての文明社会の論理である。ヒュームは、その経済的な要因にとくに注目する。文明社会の繁栄を支える原理としての奢侈と勤労とである。諸個人が生活の中で、奢侈と勤労とを統合的に営むような行為モデルの前提に立って、ヒュームの社会理論は構成されている。本節の主題は、ヒューム思想の検討を通して、その中流層論としての論理系の中に消費論的含意を析出することである。ヒュームの中流層論の背景に前提されていた当時のイギリス消費文化の諸特徴を導きの糸として、ヒューム思想に伏在する消費論としての意義をその奢侈論と中流層論とを結びつけることから明確にすることが目的である。ヒュームの奢侈論とは、その文明社会の論理を支えるひとつの系論としての位置づけにおいて、ヒュームによる中流層の消費論であったとの再読が可能である。ヒュームは、マンデヴィル批判を通して、その独自の奢侈論を展開する。文明社会での近代的な奢侈の形式とは、洗練された趣味に基づく、消費者の自由な選択による商品購買型の奢侈的な消費のことであった。ヒュームにとって、こうした奢侈とは、もはや旧来の上流層の富裕と閑暇とに飽かした一部の特権的な諸個人の悪徳的な行為ではなく、消費を結節点にして、勤労と奢侈とが個人の行為類型として統合される有徳的な行為のことを指すものである。中流層の消費論ということで、ヒュームの消費論は当然に、「富裕層の奢侈と貧困層の勤労」の図式を乗り越える議論となっている。

第5章「経済学体系の成立と学知としての消費者概念の形成」では、経済学における消費者概念の成立を証するものとして、ステュアートとスミスの経済学体系を取り上げ、消費論との関係において検討する。ステュアートの経済学体系は貨幣的経済論として称されることもあるように、経済活動における貨幣循環の諸機能を詳しく議論するものである。このステュアートの議論に対しては、その消費論的な含意において、18世紀イギリス経済思想における貨幣的消費論の掉尾としての位置づけを与えることができる。ステュアートの議論とは、諸個人の行為の自由に基づく経済的な秩序形成の論理を貨幣および市場という制度に根差すものであることを論じるものであったともいえる。一方、スミスの経済学体系は、欲望

的消費論の完成形であるといえる。スミスは消費の自由としての諸個人の経済行為が、富に基づく自生的な社会秩序の形成へと向かうことの論理を論証する。スミスが商業的社会と呼ぶ市場交換を中心とするような社会的枠組みにあって、自然的自由の体系とは、消費者役割を担う諸個人の行為の自由を保障するとき、はじめてそこに成立することとなる。

第5章第1節「勤労社会の中の消費者 J.ステュアート」では、ステュアートの『経済の原理』における貨幣的経済論を中心に見ていく。ステュアートは、1767年に『経済の原理』を公刊した。ここに、経済学はその学知としての体系性を確立することとなった。ステュアートの経済学は、需要を重視する体系である。そこでは、諸個人は欲望を充足させる必要から、相互依存的な社会関係に規定されている。ステュアートは、この欲望による相互依存性ということを経済学の基礎的論理として前提するのである。こうしたステュアートの体系とは、消費の経済学としても再読可能であるといえる。本節としての主題は、このステュアートの経済学体系を消費という観点から再読することで、そこに消費者概念のひとつの成立を見出すことである。18世紀始めの消費論は、消費に関する強固な社会的階序の図式を前提としていた。その図式とは「富裕層の奢侈と貧困層の勤労」という社会階層間での経済的な役割区分である。この図式は中流層の台頭というイギリス社会の現実的变化の前に理論としての有効性を失い、代わって、奢侈(消費)と勤労とを諸個人の経済的な行為類型として統合的に把握する視点が確立されていく。この認識上の新しい行為類型が消費者という概念の下に捉えられることとなった。ステュアートの経済学体系は、貨幣の稼得・保有・使用という貨幣をめぐる一連の市場交換過程において、勤労と消費との相関を諸個人の行為類型として定式化するものである。そこには、消費者概念がその論理の整合性を支えるための不可欠の要素として組み込まれていたといえる。

第5章第2節「商業的社会の中の消費者 A.スミス」では、スミスの『道徳感情論』と『国富論』という2つの著作間に存在する消費論を介した関連性について論じる。スミスは、私益と公益との整合可能性という問題について、経済学体系の構築というかたちでの解答を与えた。スミスの経済学体系とは、社会的行為の動機の部分に社会理論としての定式化の可能性を見ることで、諸個人の行為を道徳科学の分析対象として捉えるものである。本節の主題は、スミスの思想体系にある消費論的含意を明らかにすることである。社会理論としてのスミスの経済学体系において、諸個人の私益に基づく消費行為と公益との関係性を機能主義的な視点から検討することがその目的である。スミスは、公益との関係において、社会の中で消費が果たす機能を2つの面において捉える。スミスは、これら2つの機能のそれぞれを社会発展段階に則して整理している。ひとつは、社会変革の主動因としての機能であり、もうひとつは、社会の安定的枠組みの下にあって富裕化をもたらす機能である。社会の全成員が消費者役割を担うことの必然と、その論理的帰結として、消費者の利益の実現が社会の富裕化という公益を導くこととなる自然とを、スミスの経済学体系は、イギリス社会の近代化の

論理として論証している。商業的社会にあっては、すべての諸個人が消費者としての役割を担わなくてはならないとするスミスの議論は、公益との関係において、社会の全階層的な諸個人の利益を考慮するものとなっている。この点において、スミスの経済学体系とは、特定の社会的役割を表わす一般的な分析用語としての消費者概念を含有するものである。

第6章「結語 市民社会と消費者概念」では、本研究を総括する。ここでは、本論で検討を加えた8人それぞれが、18世紀イギリス経済思想において消費論の展開に寄与するものであったことを確認する。この8人の思想が、貨幣的消費論および欲望的消費論の議論を累積的に積み重ねる中から、18世紀イギリスの消費論の流れを形成していくものであったことを、その流れを系譜づけつつ再論する。さらにはまた、そうした消費論の流れが、その傾向性において脱道徳化および脱社会階層化という消費者概念を形成するための2つの原理をもたらすものであったことも再述する。そして、こうした消費論の展開とは、経済学という学知体系の成立に伴って、消費者概念もまた、市民社会における行為の自由を体現する社会的役割としての行為類型を表わす分析概念として形成されたものである、とする本研究の結論を明証するものであることを確認する。